

PROGRAM

交響曲第1番 ハ長調
フルート協奏曲
交響詩「海」

ピゼー
イペール
ドビュッシー

インタビュアー 鈴木順子

四季のコンサート 秋

1986年9月6日(土) P.M.7:00
浜松市民会館大ホール
主催：浜松音楽友の会

とその声価を高めた。1972年からは、更にサンフランシスコ管、クラリネット管、サクソフォーン管、ホルン、トランペット管、ユーヨー・ブラス管、ホルン、ボストン響などアメリカ各地のオーケストラに招かれて成功すると同時に、その活躍の場は、ヨーロッパにも拡がり、ロイヤル・ファミリー管、ケルン放送響、バイエルン放送響などに客演していずれも高い評価を得ている。

1968年から1年間トロント交響楽団の副指揮者、1973年～78年まではアメリカ交響楽団の音楽監督を務めたほか、1972年～85年まで音楽監督を務めたパシフィック交響楽団では、現在桂冠指揮者の地位にある。1985年よりニューヨーク州のシラキュース交響楽団の音楽監督に就任し、さらに大きな期待が寄せられている。

日本国内では、東京交響楽団の音楽監督・常任指揮者のほか、大阪フィルハーモニー交響楽団の首席客演指揮者を務めている。1975年には、第6回サントリー音楽賞を受賞した。

1941年生れ。3歳から音楽教育を受け、4歳からピアノを習得した。英才教育の権威者として世に多くの指揮者を送りだした故 斎藤秀雄氏のもとで指揮法を修め、1963年に桐朋学園大学を卒業した。

1964年2月に東京交響楽団を指揮してデビューのち、同年4月には同団の専属指揮者となり、更に1968年には、同団の音楽監督・常任指揮者に就任して今日に至っている。

一方、海外においても桐朋学園オーケストラのアメリカ・ヨーロッパ公演での成功をはじめ、トロント交響楽団、アメリカ交響楽団、ロチェスター交響楽団、パシフィック交響楽団に毎シーズン客演するなど著々



秋山和慶 (あきやま かずし)

フルート

桐朋学園オーケストラ演奏会

指揮 秋山和慶
フルート 工藤重典



プロフィール

工藤重典 (くどう しげのり)



1954年札幌生まれ。10才より佐々木伸浩氏にフルートの手ほどきを受け、桐朋学園大学にて、故林リリ子、峰岸壮一両氏に師事。1975年秋、パリ国立高等音楽院に入学。A.マリオン、J.P.ランバル各氏に師事。パリ音楽院在学中よりすでに頭角を現し、1978年より数々の国際コンクールに入賞し、内外の注目を集める。1978年第2回パリ国際フルートコンクールで第1位優勝。ただちに、パリのシャンゼリゼ劇場にて、師のランバルと共演デビュー。同年、ラロッシュ国際現代音楽コンクールにて第3位。1979年ミュンヘン国際コンクールフルート部門第3位(1位なし)。1979年春、パリ国立高等音楽院を1等賞で卒業し、そして、1980年の第1回ジャン・ピエール・ランバル国際フルートコンクール(パリ)でも見事第1位優勝し、それ以来、フランス、ドイツ、スペイン、オランダ、スイス、イタリア、ユーゴスラビア、イギリス、フィンランドなどで演奏活動を行い、パリ室内管弦楽団、イギリス室内管弦楽団、オランダ国立放送管、スイスロマンディ管弦楽団、フランクフルト室内管弦楽団、バイエルン放送管、ルクセンブルグ放送管、ノルウェー室内管弦楽団など、今までに30を越える著名オーケストラと共演し、1984年秋のフランス国立リル管弦楽団のカナダ・アメリカ旅行では、ランバル、アモイヤル、ボゴレリッチらと共にソリストとして同行し、ハチャトゥリアンのフルート協奏曲を演奏した。日本へは、毎年二度程度帰国し、全国各地で演奏会を行うほか、新日本フィル、N響、東響、東京フィル、京都市響、札幌響、群響、読売日本響などと、すでに共演しており、今や日本を代表する国際的フルート奏者として活躍中である。

桐朋学園オーケストラについて

1948年、井口基成(ピアノ)、斉藤秀雄(指揮・チェロ)、伊藤武雄(声楽)、吉田秀和(評論)ら高い音楽教育を理想とする人たちが、九段の一角に「子供のための音楽教室」を創設した。

二年後には斉藤秀雄の指導のもとにオーケストラが誕生し、厳格な合奏訓練を通して、教育の効果を一層たかめた。

「音楽教室」の生徒たちが成長するにつれ高校、短大と順次増設され、1961年には4年制の大学、即ち、今日の桐朋学園大学が設置されるに至った。この間、オーケストラのクラスも増え、古典から現代に至る、様々な大作作曲家の作品の練習に励んでいる。

1964年には、このオーケストラから選抜されたメンバーによる弦楽合奏団がアメリカへ、1970年には、ソビエト・東欧圏を含むヨーロッパへ、更に1974年10月には、再び、ニューヨーク・国連デーに出演招請を受けてアメリカへ演奏旅行し、各地で絶賛を博し、オーケストラの名声を国際的に揺ぎないものにした。

因みに、このオーケストラから果立って、現在、国際舞台の第一線で活躍している音楽家を列挙してみると、指揮の小沢征爾、秋山和慶、飯守泰次郎、ヴァイオリンの黒沼ユリ子、久保陽子、前橋汀子、潮田益子、藤川真弓、ヴィオラの今井信子、チェロの平井丈一郎、堤剛、安田謙一郎、岩崎洗、東京クワルテット等、数多くをかぞえることができる。

今回の編成は学内オーディションによって選ばれたメンバーによるものです。

交響曲ハ長調(第1番)

ビゼー(1838~1875)

音楽愛好家でビゼーの名を知らない人はいないであろう。しかし、それほど著名な作曲家でありながら、彼の代表作は組曲「アルルの女」とオペラ「カルメン」の2曲しかない。それは、彼が36才という若さで亡くなってしまったことと関係があるのかもしれない。

ビゼーは劇音楽の作曲家であった。「カルメン」に見られる特徴、たとえば生命力に満ちた躍動感、鮮やかな色彩感、南国的あるいは異国の情感、感情を見事に描き出す美しい旋律、劇的な構成などは、まさに彼の音楽の真髄である。

このようなビゼーの音楽的特徴は、1855年17才の時に書かれた「交響曲ハ長調」にすでに明白に現われている。さらに、はつらつとした輝かしいリズム感、若さにあふれた楽想や変化に富んだ音型などに、天才のひらめきが充分に感じられる。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ ハ長調 2分の2拍子 ソナタ形式

明快で古典的な構成の楽章

第2楽章 アダージョ イ短調 8分の9拍子 三部形式

オボエが奏する哀愁を帯びた主題の美しさはとてつもない。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ ト長調 4分の3拍子 スケルツォ

軽やかさと力強さが交錯する音楽

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ ハ長調 4分の2拍子 ソナタ形式

活気に満ちあふれた楽章

なお、「交響曲第1番」と言われることがあるが、ビゼーの作品の中で「交響曲」という曲名をもつものはこの曲のみである。

フルート協奏曲

イベール(1890~1962)

イベールは、ビゼーやドビュッシーと同じくパリ音楽院出身のフランスの作曲家である。イベールが活躍した20世紀前半は西洋音楽の大転換期であって、ドイツのシュンベルク(1874~1951)達がすでに12音技法による現代音楽を作曲していた。しかしフランスのイベールは、そうした現代音楽の流れとは関係なく、主としてドビュッシーの影響を受けながらも、彼独自の音楽を作っていた。その知性のひらめきを感じさせる高貴な気品に満ちた音楽は、新古典主義的な作風によるものと言われている。

新古典主義の音楽とは、19世紀ロマン派の感情過多の音楽に対する反動として、第1次世界大戦後に生れたものである。しかし一般的な新古典主義の音楽とは異なり、イベールの場合には単に音楽に対して客観的な態度をとることに終始してはいない。彼のフランス人としての感覚、いわゆるパリジャンらしい軽妙な優雅さと洗練された趣味の良さといったものが充分に感じられるのである。

1933年に作曲された「フルート協奏曲」は、上記の特徴をよくあらわしている彼の代表作のひとつである。なお、この作品はかの有名なフルート奏者マルセン・モイーズに捧げられたものである。曲全体は、次のような3つの楽章から成っている。

第1楽章 アレグロ 短調 4分の2拍子 ソナタ形式

細かく動き回る第1テーマとおおらかな動きの第2テーマによる

いかにもイベールらしい音楽

第2楽章 アンダンテ 変ニ長調 4分の3拍子 3部形式

ラベルを思わせる舞曲風の楽章

第3楽章 アレグロ・スケルツォ ハ長調 4分の4拍子 ロンド形式

変化に富んだリズムがおもしろい

イベールは映画音楽もかなり書いている。日本では「わが青春のマリアス」がよく知られている。

海(管弦楽の為の3つの交響的素描) ドビュッシー(1862~1918)

ドビュッシーは音楽上の印象主義を確立した作曲家として知られている。それは、モネやルノアールの印象派の画家達あるいはボードレーヌやヴェルレーヌといった象徴派の詩人達の影響を受けてのことであった。そうしてドビュッシーは、伝統的な西洋音楽の作曲技法を捨てて、新しい音楽への道を開拓していったのである。つまり彼の音楽の特徴は、長調、短調、機能相和声、調性といった古典的な音楽の基盤を否定し、調を重ねたり、独特な音階や和音を用いたりすることによって、真に独創的な感覚を生み出していることにある。

彼の代表作のひとつ「海」は1905年に作曲された。3つの楽章から成るが、伝統的な楽曲形式は用いられていない。また、古典的な拍子感にとらわれず、複雑に変化し衝動的なリズムに満ちあふれている。中心的なテーマといったものもなく、短い動機が次々に登場し交錯するが、作品全体には不思議な統一感がある。不協和音を多用することによって、変化に富んだ音色が生み出されている。また、金管楽器がひんぱんに用いられ、ハープ、鈴琴、チェレスタ、シンバル、トライアングルといったキラキラ輝くような音響を出す楽器が好んで使われている。

第1楽章 <海上の夜明けから正午まで>

第2楽章 <波の戯れ>

第3楽章 <風と海との対話>

この作品は、一般には交響詩「海」と呼ばれているが、曲の土台になっている詩があるわけではない。従って、いわゆる交響詩のように、詩的な内容を音楽的に描写しようとした作品ではない。しかし、各楽章に付けられた標題は、それぞれの楽章の音楽的構造を理解するのに役に立つであろう。